落花情談

# 春風日記

初篇 下

松村春輔著

A517
2

落花清譚 春風日記初編之二

東都 櫻雨園戲著

## 第三章

府下の四ふて金杉根岸と呼ぶしと閑雅ある二タ里ゆりこは上野山より丑寅の方さゆくさる藁ふて春は梅の匂ひ高く搖ゐ名ふあふ忍ぶが岡さ靡り夏ハ若葉さ時鳥秋さ野中の月代ふかゆ武蔵野のむかしをも思ひ出さるゝ風景あり冬さ

48-7508

殊更山の端に積る朝の笹乃雪音無川の音さへ
ぬ豊かの御代に住む民乃賑ひありがたき隠澤に
て火災の為に兼てより出地に寮乃儲けを做し
まさに浮世を放れる風雅を楽しむかれ家
の多うる中に取分きて家を建てて庵の趣み羨
麗といふべきなれども物騒き做せし別荘を
富澤町の呉服商上州屋正三郎が母様より養生
なりの假すまゐ頃しも七月の末つ方暑さそ

げしき昨日今日訪ひ来る友もなかりざりバ朝よ
り午睡も為倦きたる折しも訪ひ来し二個連れ
も僧名如仙可水かり紫肉もかく禁り戸を叩け
つ如仙と称を名乗り沙在庵なる可水と共に沙不
沙法の御見弟なるがら沙尋きふしと聞ひく主人
の四三郎僧名堤花を立ち出でコレハ〻〻五両夫人
先ヲ此方へ沙通り下さんと表稼ならば五免を
蒙り五書齋へ参りまゐり時に其の後ち五世

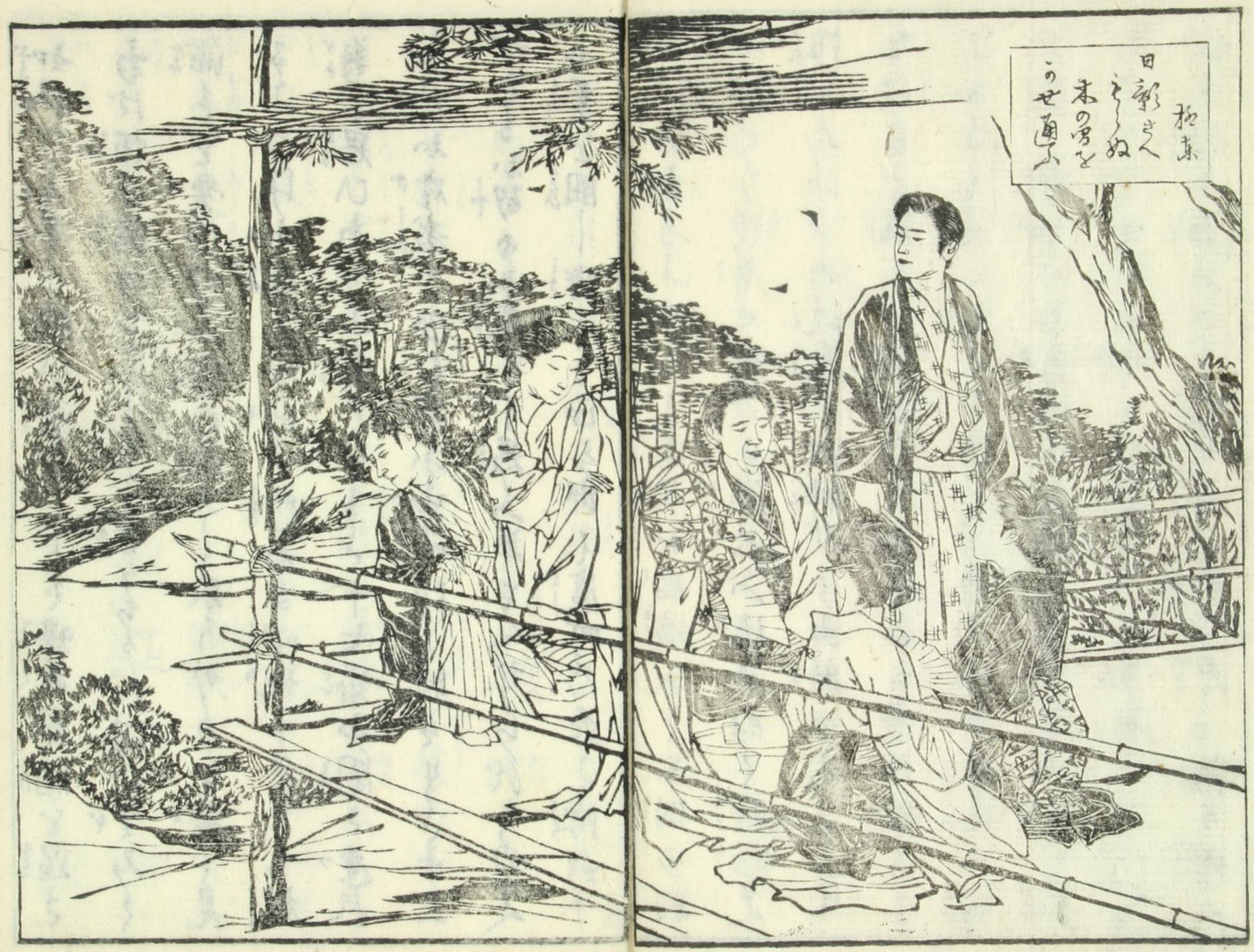
沙汰計りで濟ません何分身体が能くないので
オツト皆迚謂さまゝか過ぎて身体が能くあゝのは
君ゝ限りも右同断コレハ〳〵可水さんの御身体も
も似合わへ養生と君と一杯ゝ右同断も恐れ入
るぜ〳〵〳〵復色雙の白服撃ゝわへとしひあぶら
下女お持てき〳〵を飲みつゝ実ゝ動も冷えの
清聴走ハ感心さわへ茶禅味地の自然の清水
ざあゝ氷水ゝり格別さどゝも市中の雑理の能

ひも水の能くなゝのでゝ恐るぜ保〳〵あゝ重宝
で甚外とあつゝ日あやア酒屋へ三里豆腐やへ
だらうわへ堤ざがきうで無いへ先ッ玉の屋乃温
泉蕎麦亭の料理あんぞア根岸の里の自慢えのサ
ツレおや開けさわへ世界中も三日見如間ゝ揚ゝ
とい穿つゝやつさわへ堤久〜振の御来臨ゆえ
御注文を伺つて島殿一杯始めゝうわ味ゝ浮
わゝ失敬を致〳〵是で間の抜けわへ仲宵

の積りざからをそのいアハヽ（両）アハヽ（両）堤花さん今日を
聊か仕構ありさ實ゝ盆前から勉強極まつゝわ
だらら両個ゞ至急ゞ思ひ付ゞ今朝ゝ瀧の川へ
絶涼と出掛ゝ所で俄ゝ君を誘つゝゝ新しゝ氣
晴しゝふもあるだらうと態ゝ此地へ廻りやしゝ
分けさ沖一所ゝどうでもやう今ゝら直ゝ（堤）それ
も誠ゝ深切ゝお志しを理解ゝしちや活力へら
ら直ゝ出掛ゝ志やうゝ（如）是も早速の内兼知で大
慶至極時ゝ可水さん連中ハ最様出しやしゝたらう
わへ（可）ゝ所ぢやアりますめへ首を長くして
待ゝ居るざらう（堤）まゝ此外ゝ連中ゞおあんか
さるのゝへ（如）（ナニサ）連中をありませんゞ猫連を二三
疝掛けてやつゝのさ堤花さんのお氣ゝあやアるる
めへあまゝ王子の猫ゝ毛蟹ゞ猪しゝぐら
うと蔵町猫を下足前へ（堤）ハア走ゝ何から何もうで
五軍配の届きゝさあ仕構（サ子）へと唱しゝ堤花も

仕度をして皆様お待せ申しまして誠にお侍を致し
まおやうと西三郎が庵を連れ立ち上野の麓を
裏伝へ人力車を急がせて玉子をさして急ぎる
徒て堤花等は三個を玉子稲荷の社ふまうで山
道傳へふ滝の川の縁を泳め瀬の白糸幾筋かを
ふむとびつ扇屋料理茶屋の風入りのよき橋
へ登れば前より待ち居る件の藝妓三人が「オヤマナ
お早う皆さん今日は前刻から三人でぞんなふ

うお待ようよう」とよサアお羽織とて三個の羽
織をとりて着せ渡ゆる湯形ふ浮絵ぬく揃ふ
推ふ有りの辻裏とは神なるぬ躰のちるう
なけまで後ろ姿思ひ今せめる西三郎乃縁ふ
と有るも最と怪しき事ありけん今日扇屋ふ招
うまして藝妓の内壹個を薩町の吉川屋の抱之壹
あり二人ふ花ふ雪といひくくこ壹盛りの酒
数と初り玉へ徒て青の数を尽し酒も廻りて


松末
日新さん
きゝぬ
末の男を
このせ通ふ

如仙可為等ハ醉ひ艶しきも嫌為酒を逼さ
わば獨り樓のおもてまふ脇うちけ川ふ望みく
流まを愛でつふ露の面ぎ取りなりを能く見
るふつけふ國ふも似く所ある心地してうち拍
類き思ひあり小露もいまぐ十七累ふ國さ連れ
られふ座敷で正三郎ふ出逢ひ一時をまぐ十三
四なるお別ふ暮く思ふ年ぐ人ならばそのう人
ふ墨を囲ー時より正三郎を藤町乃義く浮れ

くなけまは小國ぶ今もふ抱しさる文の事お今
更く忘くふくあくねどもあ三年も逢ぎりく
ふ今日計ぐも出會さる座敷の都合二妓のあも
もく種く心ふ思ふうち二妓ハ湯治と偽んとて
下の座敷へ行く踊も正三郎と小露のあ個如仙
可為ハ白河夜舟前後も知くぐ睡眠せー隣を見
合せふ露ふ向ひ小露さん暫時逢あくつく風ふ
六層美くくなつくのうつ別ぐうう昌新ハ

上州屋の若旦那ですわへ最前うつさうよ達ひ
なしと思ひまして種々考る極矢張さうよ達も
あひのでまして分かつてゐぬ事と謂ふさる名
も可愛ありて最優しく孝心至つて正三郎を魂
恍惚としてゐる所を知らぬ此年の四月
から暫時大阪へ旅稼をして此春帰つて小国の
事を尋ねて見たが新しい事の行き先きがさつ
ぱり知れぬ小国ふ限り唐情ふ仕打ハ[illegible]

るまひと思つて見ても我が知らぬ意が
氣になるやつぱりそれ故旦那を姉さんの死
なつてからのち五年ばかりませんのでまわへ
小国も死去つて夫ぢやア阪地で此年の春見たのハ
矢張正三郎で変つてやうまを知せんと後ふ歩世
え亡魂乃遥々尋ねて旦那夫ぢやア[illegible]姉
さんハ阪地へ尋ねて家りまたの[illegible]ナニサ[illegible]でも
なひがと[illegible]ハ習へど小[illegible]が成り行き知れぬも

道理と越し方と思へば忍ち塞る絆あんとも更
ふあら常の露と消えんず殿果さみ哲時鐘も亦
かりしらば小露も俱に涙と含みて五体じ去んし
のと是那方むけれど死去る際ふ時さんが思的
ふ逸さ其時よお渡しまみせと思めてもした
父と肌身と放さで持く居まもしひあでる帯
メ乃内より取り出せ父と是ちん小筆が遺物死
際ふ書たる涙の玉章とるも嬉しくとり揚げて

見ば爲れをまも穂の薄きあへぬ人と松浦
潟牡の古事ふ河くあくと歌き八間ど情人が憂
ふ沈みく身を捨し操を見せと汝雪の松千代と
契りし兼言と敢果き夢の甲ト思ひ合せ河
もれあも備あの文れ蔬増も初編と妻しく綴り
し如く伯父史助が奸計ふく絶と命を無き物と
瞋を断ちつ死もてる覺悟の文く見たまふ度
人目もあまで正三郎と文と納見て小露ふもひ

「小屋」のおまへ方たのんざるも実のいるのを便り
ふして届く文章に心乃操秘しぬ貞女の仕
うるそうして郵便つくを何時ぢらうわへお
まへを知つて居るぢらう「小」姉さんの郵便りを
したも此春二月の中旬でもつて「何」所の善提だ
の知をめへ「お」葬式のお善提況でもの「て」確り
深川乃妙専寺と聞まつさから一度ハ佛参りを
なましやうとおもひまつても更切り知を実の

裏で濟無い事と思ひまつよ「十二サ」おまへを恨む
節を毫ともなくのらうら是までお墓の清掃も高
杉ぞ怨んぶ自己寺が氣祖しいつて同じ言葉を繰
ぞうび帰返しくる少田巻の最も淋しき物ぶく
り「モシ」旦那さん姉さんの敬果い事を思つても便り
勘かん私の身を動う不便と来始終お草よりの
てやさいまつて「文」りやおまへの謂そぞとも自
己の心を及ぶだけ世話しいのちゃ可哀ぶら

姫路も不実を責めんとこうち考れ思つゝ居るが能
ひらかべ支考伝うけ出嶋と帰りふ私の意易
く何時も捨びさ切く家へ一所さ送つて嬉しい
初へし謂ふ形しも出花出雲も湯治と志はひ楊
えかへつり如仙芋と整理し嶋起して帰らんと促
も頃も日書乃里なしゝ初ぐも夕景しき僅ふ花び
起ふ澤辺の蕾折しも露い草の葉ふうつる蛍
の雅号山今日の嗚しも提花と少露少憐れ蓋ふ

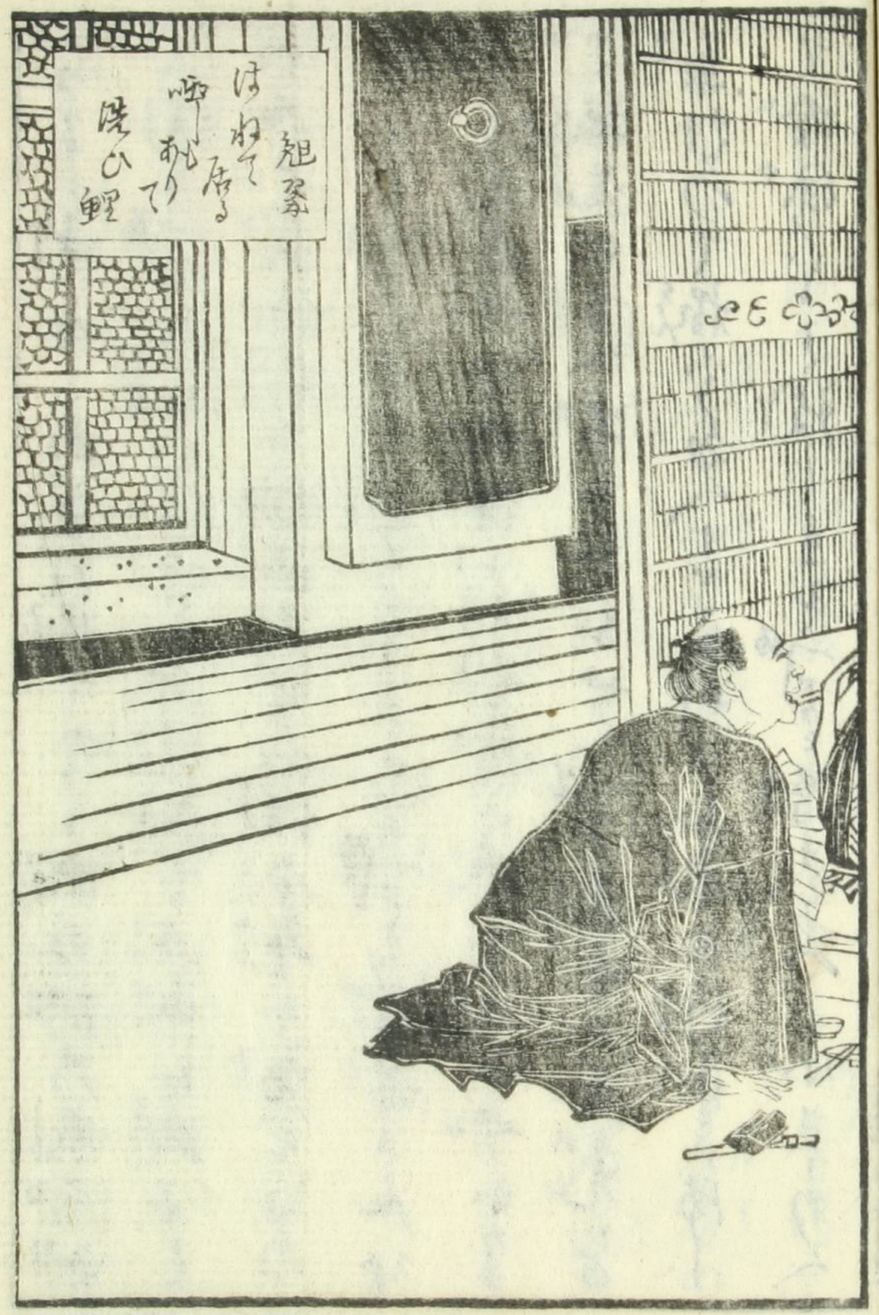
さも似さる皆偶然の荘子編南柯乃夢の人情世
態如仙可水もかゝ計りふ露と提花の中らひを
知るらしおけもバ帰りゞけ是非芳原の俳を見
んと元来し道へと渡ふものかゝ勢ひ止むを得
ざるあやかのゝ町乃三個を直さうへて提
花を使ひ芳原さして急ぎける小露が意提花の
思ゝ無情ふ割れゝ木言かさハ作者だりか
看察も面白かゝぬやうかわど是すら實の手続

きなれぬ後の條下を讀暮て知まん佛芳原の二
○カれき角都度〻言もんも事繁けまじ着きて
茲ふ記さぬ堤花も獨り原の二○カを見まど
も樂しまぬ件の二個も浮きつ〻帰る景色もなん
のを幸ひ別れを告て金楢の寮ふかへりて夜も
すがら小雪が操死と小露が滅思ひ出しても堤
夜を寝もせて鶏鳴るを待淫びつ〻小雪が菩提所
深川の妙寺ふ尋ね行き堀の蔕ひぢ打ち排ひ
香華を手向讀經を頼みて夫より一心ふ小園が
迂善菩提の外まも他事もなく金楢の寮ち籠り
て此程も富澤町の本宅へ帰る事なく打ち過ぎ
けるも愚のなるやう見ゆめれど恋る場合ふ望
みも痴情といふも堤花が意地を寮して見
れば世理成ぬさるふや堤花の氣病ハ重く昭の程
ふ泊りて側の觀る目ぞ痛哭けり

第四章

茲に浅草御蔵前片町に代々札差を渡世なし
て家いと豊に暮しける蜀黍屋駒二郎といふ者
あり父を駒右衛門といひ篤実堅固の性質に弱
二郎が孝養に仕ふる事の切なれば出入の輩も
いつれも更なり遠き近所乃誉者なるまで両親乃
喜悦び大かたならず更なざにるを思ふ祝心ふ
も駒二郎も今年ハ二十歳のうへ越せば似合も
しらるべき嫁を向へ早く初孫の顔見せ孫〳〵

〳〵依〳〵譚ひ何誰ふも然き嫁あまた媒妁してた
まるべしとまりふ氣を揉みつ今日〳〵
見夫婦が差向ひに浅草の事を語り出で殘る暑
さを忘れ不忘れ親〳〵夕暮の庭ふ吹き入る涼
風に舌鼓を為る風鈴の音信て来る其者を見
吉原の幇間ふ〳〵二代目その名も高かり〳〵櫻川善
孝あり茲に父善孝の病りし時ふり此蜀黍屋の
氣〳〵入りふ〳〵物見遊乃催しあるを必ず借き連れ


旭翠
はねて居る
呼もあり
て
跳び鯉

らる〻中ゆあるべし陽てなく次の間乃敷居側
ふ遠り〳〵善今日も何時も邪魔壮で此節も減さも
や強世間徒計で損涙ません偽今年も動もいい
ますでも暑ひふやァ辺りまし〳〵コレハ善蔵さんい
つも五達者で結構〳〵毛所ハ風が入らせぬ
サァ掾先の方へ出このけかせへ善〳〵ヱ親みふ五兎を
家むつて掾ぢゆへイヤさらわいお水が行届き体
て冷涼〳〵と涼しまし〳〵ドウモ暑さあやァ水さわ〳〵

飛御なんぞと吹分けふいのあるう〳〵一層塩ゑ
るだらうと善〳〵ヱ仰せの通りで其中でも善蔵の
宅なんぞァ鶏屋の稗蒔で日中〳〵来る日も蒸も
さ麗麗暑蒸田舞ぢで恐れまし〳〵分けさ子ゝ
〳〵吐も掾〳〵も搗をもり酒肴を持ち来りれ
ぢ主人ハ善孝さ〳〵なんふも堂へがまァ一ッやんゑと
積口をすゆ〳〵して善孝ふ市〳〵是もり粘口の煎り
蜜り中の吹〳〵〳〵察そべ〳〵善〳〵れハ頃載を沖新造

さんのりがさう本鮮魚を減さ結構でへエ巴屋で
煙草イまのまう這れまつかりを動も差閊ぎやア頃の
れません〻〻山葵れ利き加減もどうもまやく
謂ひなぐら顔を碗面海を出し口を尖らしアー
實さ結構ホーハ〻〻〻能〻利さかへ〻〻〻善アーハ〻〻
時さ五見物ハ如何ですね五彩造さん一晩のらッ
おやいま〻〻今年のも随分奇麗で汚れまも成程
二〇カぶのおめく達のは重番だらうぶ世話やく

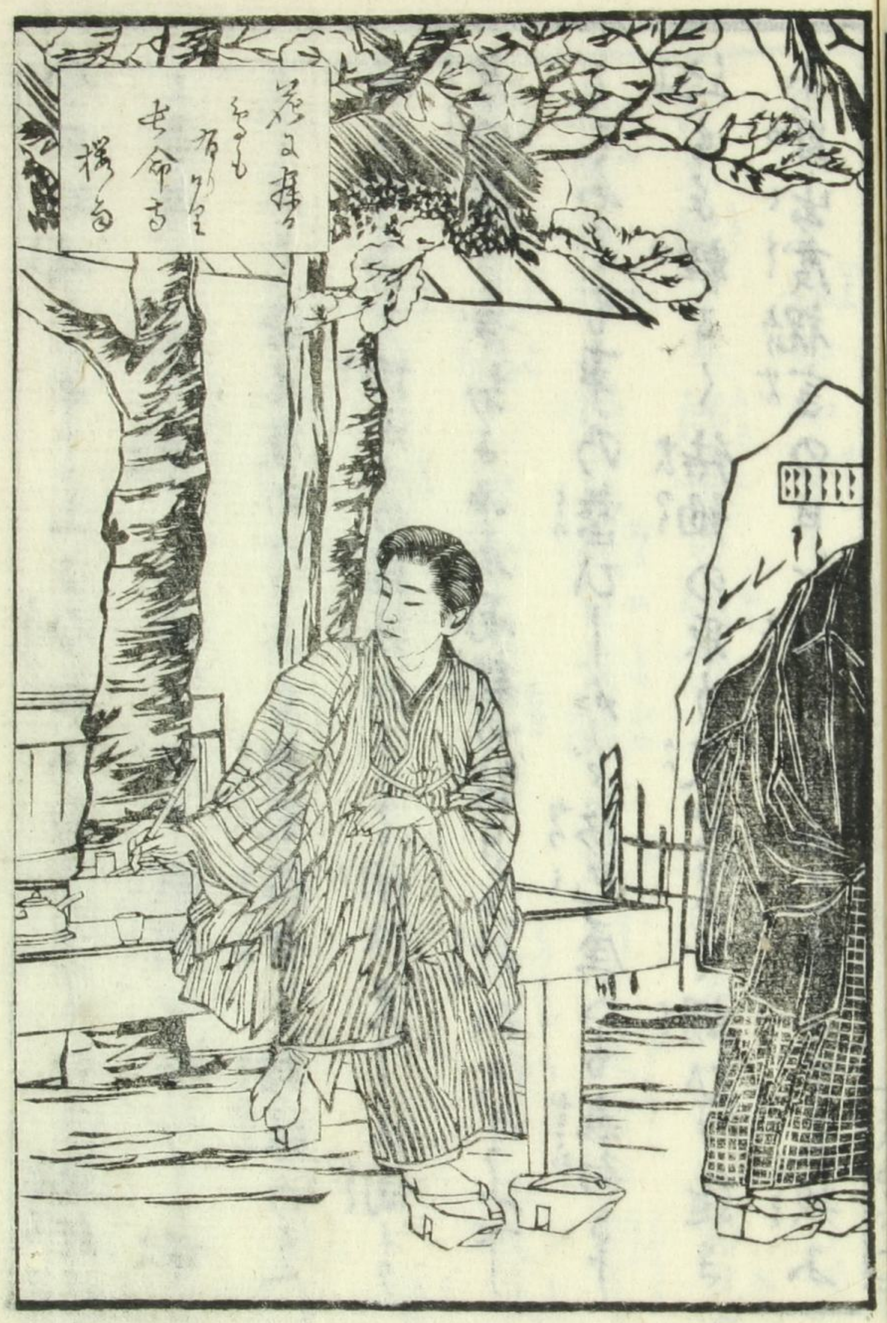
様おやア最刻限おやアわへこの善〻〻如何まう善孝なん
ぞ〻真の張居役で民中や四孝ぶ動ろあうろ遣
付けまをかう帰らずもやう汚れまも保嘉湯
の為め引け前ふ那出しを殺しまして得を物祝
俄の事なるべしのいるお産敷丈けも中〻〻遣しません〻〻
一高法ふ掛けちやア感心なものさ子へ〻〻善餘り雑
舌ふ鼻ぶ入りまして今日伺つ〻肝要の用務を失
念為る所ぶつ〻ぶだかう回輩が老衰ぶなんぞ〻

悪るく謂ふのも當理あり拵サ時く旦那倩今日伺ふ
一件はきらいらお咄しで五度まで着旦那も十二
四時頃から深町の先生乃所へ出掛けやしたるも
浪先生の古宅へで御座まさやりく謂ちゃ善者が
咄し出す傳下々言葉が続ふく聞えたまの爲
それおやや本場の底已屋の娘ぐ將を見潔めく見
悲かるも縁談が成旦度と仰さやるのざと出まへ
も聞てなるぶらう本場の材木渡世乃間で底已屋

といつちゃ一と謂つて二とはきらなん角代で
嬢子も義くしくつく若約ぶといへば將の嫁く
不足をなからう〻そうで御座まさよ年を仰累
ふおなりの〻へイ活嬢さんも年七でお年ようは
謂し内場がお生旦付きで私共が案つても口なん
ぞはお利きもの成しませんがお呂遣ひの女中
ふまで能くお氣の付く五評判で入くうちゃいた
そん分内場が鳴るが動して弱二郎を見潔て嫁

ふなり度とき是も縁付くだらうが何地ぐ將を
見つけさといふのゝ子〳〵善れハ毫ふ況あでも
有りそふおお吐しで全体此春三月の事で善孝
が若旦那のお供をしてこの向島乃花見さまゐり
もした駒ムしそふだつさ春折さま向嶋を逍遥と梅
若へまゐり通りがけさ長命寺の西と接け茶ら
櫻餅やの床机ふ腰かけまして一杯して居ります
と調度隣りの床机ふ辰巳屋の清蓮寺が居〳〵

つて其折若旦那をお嬢さんがそれ〳〵お見滝め
なさつさと見えます世おそ弱二郎も甚疱子を見
そ何とゝ謂ひまして〳〵さろわへ十二若旦那の方おやア
お隠お氣も付きませんやでしたが丈らお
嬢さんと朝晩若旦那の変むつこりと氣ふなさ
いまして〳〵そろ〳〵五癒まとふ一体で重蔵のお供
が善孝ぐから聚を彩んで下西しをするぶ何と
りの近遠と五相詩がお極りふなりまして嘲く



今日お嘸し申し上る合和ふ祝り生し たと為終
し善悪も浮の世しふ時を移し暇間を告げく帰
りしかど蕈茸屋のくくふも親類縁者さ相談のう
駒二郎ふを徒かくの縁法ひりと問ひ見しふ固より
甚心深き者ふるゆ名両親の能きふ汁ひたまふべ
ともやくも事乃整ひしかど房已屋つも表向きや
辺もも軽るく結納の取り交せまで調ひく近き
ふ日出度祝言の日を撰みつ房已屋ふてら頻ふ

急ぐを娘のお雪さ如何ふ嬉しき事ふるべし盛
ま忙ぎ欲るが浮世の儚ひ肖さ材雪花ふ咲かの芸
末屋の駒二郎さ或日友達ふ誘引ま蔭町の割烹
茶屋豊月楼くしふるふ遊びしふ甚時許多の義妓
も来り祝ひつ舞ふ舞ふ奥ドりる打揚遊興有名さ藝
妓の小露さ一歩後ま立て接へ来るふ多の雅彼も
悪くいふ哥妓なりう和ど世中ふく名際のうふ小
露が姿さ雅ふ者を移さどらん源石の義兵屋弱

二郎も今来し小露を一目見るより俄に起る恋
情のまゝ止むべくもなかりぎりより甚の日ハ夜
は思まくも如何あらんと帰りしが是より日夜
のけ〳〵先方へ豊育楼へ通ひ来る小露を始終揚
げ結めの遊びを儲きてはは彼方中宵に浮き歩行
て我家へと帰る事まで通ふのみぞ両親病
く氣をもみて人をして異見を加るといへども馬
耳東風ふ聴〳〵べ〳〵あるのみぞ去り迚小露を強て二郎と

忌嫌ふて〳〵行ど意を決し解て逢ふ夜の情を
契らす拒さ風ふ受流し靡びく拒ぬ乃見てぞ
ふ世駒二郎ハ弥慕ひ小露がいふ様せて行時
あも妹の心を見せまくいれあんとぞ思ひける
格まで優しき弱二郎が慕ふを小露も如何ある
ふや身を随せぎる故らしと又を一個乃好男子
が小露を挑む奇談ハ乃もども巻を改め章を繋ぎ
て二編と記まを訪ち玉ひ終

落花清譚 春風日記初編之二終

# 處女香

桐箱入 價三錢
余ハ二十五錢ニ
若入ニ小雪ト

名香 芳馨のあ〜ろんふ〜て 貴香都よ麝を出〜色白〜〜て
ふまひてそば久すそ〜さけ 種材の沈のたゝみの麝ゆ〜も沈香〜沈香半
清合但し年まゆ〜 活方ゲ用ひても用ひる方法あれば
常に用ひく志の婦人と為りたまへべし

東京書肆 文永堂製



明治十三年十二月廿八日御届

著述人 東京京橋區南鍋町一丁目壹番地 松村春輔

出板人 東京京橋區弥左衛門町十三番地 武田傳右衛門

同 浅草區三好町七番地 大川錠吉

發賣書肆 同 全區新福井町五番地 高梨彌三郎


010190517743